

1978年夏期講習の御講話(16)

牛乳から白い色を切り離せないように、 ラーダーはクリシュナから切り離せない

もしアートマの側面を知ったなら、
その人は至福を楽しむことができるだろう
もし人がそれを知らないなら、苦しむことだろう。
ブラフマン〔神〕の知識は人をブラフマンへの融合に導く
このサイの言葉は真理の声明なり

清らかな真我の化身（パヴィットラアートマ・スワルーパー）である皆さん、
ブラフマン〔神〕だけが真実です。これはアートマの観点〔見方〕です。人は、自分がブラフマンとは別の存在だと考えていて、家族に関わるあらゆる類いの問題に巻き込まれています。すべてのジーヴァ〔個我〕に現れている生命力は、ブラフマンに他なりません。ブラフマンは言葉で言い表せないものです。ブラフマンは永遠です。ブラフマンは分離できません。ブラフマンは無限です。ブラフマンは周りのすべてのものに同じ態度を示します。それが永遠であるということは、それには始まりも終わりもないと述べることによって、さらに説明することができます。生まれてきたものは何であれ死んでいきますが、生まれてこないものには死もありません。これがブラフマンの第一の特徴です。

二番目の特徴は、それが言葉で表現できないという事実に関連します。それが何であるかを決定し、説明することは誰にもできないのです。

三番目の特徴は、それが無限であることに関連しています。ブラフマンの中にはあらゆる種類の力が無限に存在しています。一種類の力でさえ言葉で説明することのできない人間の性質〔能力〕では、数えきれない種類の力を説明することができないのは当然のことです。自分の家の屋根の上に登れない人間が、どうして天国の領域まで昇れるのでしょうか？ 神の創造のほんの限られた一面である自分自身を理解することもできない人間が、どうしてブラフマンの広大無限な性質を理解できるのでしょうか？

こうした状況にもかかわらず、時おり私たちは、自分の持つほんのわずかな知識や、自分が達成したごく小さな世俗の成功を誇りに思い、神の性質はこれこれであり、神はこれこれであると主張する人々がいるのを見かけます。これらの人々が受けた教育は、世俗の物質的な側面だけを扱う教育です。彼らのエゴ以外、他のどんな達成〔実績〕が、彼らの貧弱な知識の範囲には入らない霊的な事柄について、語

る権利を彼らに与えているというのでしょうか？ 実際、彼らは自分自身の特性について語る能力も持っていません。実に、自分が学んだはずの領域の問題を詳しく述べる能力もない人間が、神性とその聖なる側面、つまり高次の知識について話すことなどできるのでしょうか？ 実を言えば、この地上のどんな人間にも、神性の本質を断定し、説明することのできる能力はありません。実際、人間が習得できる学びのすべては、神の創造物の選ばれた一面だけに限られます。その一面ですら習得できないという状況において、どうして神の無数の側面と顕現を理解できるのでしょうか？

ブラフマンの最も顕著な特徴の一つは、姿形をまとうことも、自らの顕現の基盤を使うこともない、無形の状態においてさえ、その力と力量を表せる能力です。もう一つ、心に留めておくべき特徴は、ブラフマンの顕現には欠点と呼べるものなど何もないという事実と関連のあることです。何であれ、語られること、見られること、あるいは、なされること、考えられること、あるいは、伝えられることはすべて、この世の人々の繁栄と利益のためなのです。どのような言葉も、どのような行為も、神自身の利益を意図したものではありません。神の思い、言葉、行動には、利己主義を感じさせるようなものは一切見受けられません。ブラフマンの相において語られることは、すべて真実〔真理〕です。ブラフマンの相において行われることは、すべてダルマです。人々が狭量な考えを受け入れて、不当な、あるいは不正な行いをする所では、神はただ、一切の目撃者であるにとどまり、そのような状況の中では何の役割を果たすこともありません。

明るいランプの性質は、光を放つことです。そうして放たれた光の中で、多くの人は、自分の理解したい文章を読むかもしれません。また、さまざまな善い行いをするかもしれません。彼らはまた、ランプの放つ光の中で、盗みを働くかもしれません。光の助けを借りて多くの悪事を働くかもしれません。しかし、ランプそのものは、ランプが放つ光の中で読書をして恩恵を受けた大勢の学者たちのおかげで素晴らしい評判を得るわけではなく、そのランプの光を用いた人が書いた間違った計算や、そのランプの放つ光の下で盗みを働いた人々のせいで軽蔑を受けるわけでもありません。悪いことが為されようと、善いことが為されようと、それはランプのしたことではありません。それと同じように、神は、この世で人々が為した善や悪によって褒められることも、欠点をなすりつけられることもありません。神は、起こる一切の出来事の目撃者であるだけです。

ここで私たちが取り上げるべきブラフマンの特質の最後のものは、すべての創造物の中で、ブラフマンと同じ地位にあるもの、あるいはブラフマンに匹敵するものを見つけることはできないという事実です。ブラフマンは無比であり、唯一なるものです。ブラフマンには、ブラフマンだけが匹敵します。全世界にブラフマンに肩

を並べるものではありません。それほど神聖なブラフマンの相は、人類に役立つように、時おり自らのサンカルパ〔意志〕によって特定の姿をまとい、その姿で出現するのです。

そのようなブラフマンのサンカルパ〔意志〕の一つは、「エーコーハム バフッス ヤーム」（唯一無二である私は、多様な姿をまといているように見えるだろう）です。牛乳に少しカード〔凝乳〕を加えると、初めてその牛乳はカードに変わります。加えられたカードも、以前に牛乳から作られたものです。ここで私たちは、牛乳とカードの関係は切り離せないことを理解しなければなりません。それと同様に、ブラフマンの中に存在するさまざまな能力が、創造世界の中で、ただ、異なる姿形をとって現れているのです。実際、これらの顕現した姿は、ブラフマンの顕現していない姿と、切っても切れないほど固く結びついています。つまり、顕現した創造物として映し出されているものは、ブラフマンの鏡像にすぎないのです。こうして、創造物はそれ自体を、仕事すなわちカルマとして現します。それゆえ、ブラフマンは主体であり、客体であり、物質です。主体、客体、創造行為の合流は、人が神性を手に入れるための道なのです。

パラマートマ〔至高神〕を起源とする創造物が本源に帰って融合することができるように、私たちはこの世における行為を義務として受け入れなければなりません。すべての人間の行為は、創造の目的に到達し、最終的にはそれに融合することができるようなものでなくてはなりません。「タット トワム アスィ」（汝はそれなり、タットワマシ）の「タット」はパラマートマ〔至高のアートマ〕、「トワム」はプラクリティ〔自然〕、「アスィ」は信愛です。信愛の目的は、プラクリティ〔自然〕とパラマートマ〔至高のアートマ〕を一つに結び付けることです。しかし残念なことに、私たちはブラフマンのサンカルパ〔意志〕の結果として創造された周囲の人々の中に、ブラフマンの相を見い出すことができません。しかし本来、ブラフマンの投影であるこの創造物のすべては、ブラフマンの相で満ちているはずなのです。

「創造物」、すなわちブラフマンの投影は、「ダラー」と呼ばれています。「ダラー」〔創造物〕は、最終的に創造主に溶け込むため、いくつかの道をとります。それらは、仕事〔行為〕の道、英知の道、全託の道です。創造のすべての重荷はパラマートマ〔至高のアートマ〕によって生み出されるものであるために、創造物は「バーリヤー」〔妻、配偶者〕と呼ばれ、創造主は「バルター」〔夫、扶養者〕と呼ばれています。すべての重荷を背負う主は、「バルター」すなわち「重さを担う者」と呼ばれています。パラマートマ〔至高のアートマ〕すなわちプルシャと、創造物すなわち「バーリヤー」の合流は、信愛〔バクティ〕あるいは全託の道と呼ばれています。

プラクリティ〔自然〕には、自分自身の重荷を背負う力はありません。それに基づいて、プラクリティの特徴には、「アバラ」すなわち「力のない者」という名称が付けられています。一般的な言い回しでは、この言葉は「女性」を意味します。弱くて力のない人が、「アバラ」すなわち「女性」と呼ばれているのです。この意味においては、創造世界の一部であるすべてのジーヴァ、つまり一人ひとりの個人は全員、弱い人間であり、女性なのです。空腹、怒り、嫉妬、エゴはすべての男女に共通しています。同様に、悲しみと喜びは男女ともに体験しています。違いは名と姿だけであり、他のすべての性質は男女同一です。ですから、もし性質という観点から人々を見て、名と姿を無視するならば、地上にいるすべての人は女性なのです。

ドラマの舞台では、何人かの俳優がさまざまな役割を演じますが、俳優たちが演じる役は現実のものではありません。彼らはただ、舞台とドラマという目的のために演じているだけです。女子大学でも、少年、老人、王、王妃など、さまざまな役がドラマの舞台の上で演じられますが、実際は、すべての俳優は女子だけです。物語の中では、夫の役も妻の役も女子が演じています。ですから、実際には、ただ舞台の目的のために男性や女性として登場しているだけで、どちらも女性です。それと同じように、全世界は一つの舞台であり、すべての人は俳優です。彼らは皆、何らかの役割を演じ、舞台の上で演技をしています。唯一のプルシャ〔男性〕は神です。それ以外のすべての人は弱い人、つまりアバラ、女性です。これが、この世の人々が常に苦しみ、何らかの悲しみに悩まされている理由です。

今述べたような側面を人々にはっきりと示し、人間を神に融合させるために、創造主、すなわちパラマートマであるクリシュナ自身が、人間の姿をまとって降臨しました。プラクリティ〔自然〕であるダラー〔創造物〕は、万物を象徴する役を担ったラーダーの姿をとりました。それゆえ、私たちはラーダーを、万物の典型的な型をすべて象徴しているプラクリティの使者であると見なすべきです。ラーダーは、クリシュナの姿をした神聖な主に到達することを目指す人々のために、多くの理想の型を模範として示しました。このすべてにおいて、私たちはラーダーの努力とクリシュナの応答の間に存在する近しい関係に気づく努力をしなくてはなりません。

ゴークラム〔牛の里〕村のすぐ近くに、ヴリシャバプラ〔牡牛の集落〕という名の場所がありました。ラーダーはヴリシャバプラに住んでいました。ラーダーは、自分はプラクリティの具現であり、パラマートマとつながっていることを最初から知っていました。万物はパラマートマの投影にすぎません。ですから、ラーダーは創造物を象徴し、クリシュナは創造主、パラマートマを象徴しているという状況において、ラーダーとクリシュナの関係は物体とその鏡像のようなものでした。

肉体上のラーダーはクリシュナより 9 歳年上でした。ラーダーはナンダ〔クリシュナの養父〕の従妹（いとこ）でもあり、ナンダと親しい関係にありました。クリシュナがナンダとヤショーダーの家にやって来た時から、ラーダーの思いは、クリシュナにもっと近づきたいという方向へと形をとりはじめました。ラーダーは、どんな時でもクリシュナのことを考え、クリシュナの御名を口ずさんでいました。ラーダーの日課はクリシュナと結びついた仕事でいっぱいでした。当時、クリシュナは 7 歳の少年でした。毎日、クリシュナは、寢床から起き上がると、すぐに母親から牛乳をもらい、ヴィリシャバプラへ行って帰ってきました。母親はそのことを何も知りませんでした。どこへ行ってきたのかと母親が尋ねると、クリシュナは牝牛を探しに行っていたと答えたものでした。ここでもし、クリシュナは偽り〔真実でないこと〕を話したのではないかと疑う人がいたら、クリシュナは人生の中で一度も偽りを話さなかったということを思い出すべきです。

この中の何人かは、心の中の不純物や邪（よこしま）な思いの結果、それは真実ではないように思うかもしれませんが、クリシュナが話すことは何であれ、常に真実でした。牝牛を探しに行っていたとクリシュナが言うのであれば、それは真実です。ヴェーダによれば、私たちは大地を牝牛と見なしています。大地は人間が必要とする栄養をすべて生み出すからです。私たちは、母なる大地、母なる牝牛、母なるヴェーダ等々と言います。この点において、すべての人間はこの三人の母親の愛しい子供です。ですから、創造物を象徴するラーダーを牝牛と見なすのは、偽りはありません。このように、クリシュナの心には、生まれた時からずっと、ラーダーの思いが焼き付いていました。

こうして物事が過ぎていく中、ラーダーはある日、乾いた牛糞を拾いにブリンダーヴァン〔トゥラスィーの森、ブリンダーヴァナ〕に出かけました。ラーダーはその森の町に入るのに苦労していて、クリシュナはそのことを知っていました。その土地の長（おさ）はナンダで、ナンダの命令で番人が入り口を守っていました。クリシュナはその番人に、ブリンダーヴァンに入ることができるのは男性だけで、女性は立ち入りを厳しく禁じられていると教えていました。ですから、ラーダーがその日、乾いた牛糞を集める籠を持ってブリンダーヴァンへ入ろうとした時、番人は、女性はブリンダーヴァンには入れない、と言いました。それを聞いて、ラーダーはとても困惑しました。

それから、ラーダーはにっこり微笑んで尋ねました。「あなたはブリンダーヴァンにいられるのですか？ もしあなたがブリンダーヴァンに入れるのなら、私も入れるでしょう」。番人は答えました。「私は男ですが、あなたは女です」。ラーダーは答えました。「あなたは大きな間違いを犯しています。この世界では、クリシュナだけが唯一のプルシャ〔男〕です。他の人はすべて女なのです。もしあなたが入

れるのなら、私も入れます」

そうしてラーダーは強く反論し、番人に尋ねました。「なぜ男の外衣と服を着ているからという理由だけで、あなたは自分を男と呼べるのですか？」。そして、ラーダーは無理やり布林ダーヴァンへ入ろうとしました。後からやって来たクリシュナはそれに気づき、ラーダーはクリシュナの命令に背いて無理やり入ろうとした、しかもラーダーは女性なので、命令に背いた罰として税金を払わなくてはならない、と言いました。ラーダーは答えました。「おお主よ！ あなたがくださったハートだけが私の唯一の財産です。私はそれを税金としてあなたにお返しできます。私にはこの方法以外、税金を払うための富も財産ありません。私は喜んで、私の唯一の所有物、私のハートをあなたに明け渡しましょう」

クリシュナは答えました。「黄金のようなラーダーよ、布林ダーヴァンは、パラマートマとしての私とプラクリティとしてのそなたの間にある神聖な関係を、永遠不滅にするために出現した。後世の人々は、クリシュナは常にラーダーのハートの中に祀られていたことを知るだろう。この私の約束の言葉は、ラーダーとクリシュナの間に常に存在する関係の意味を伝えてくれるだろう。プラクリティのあるところにはパラマートマが存在する。パラマートマのいるところには創造物が存在する。パラマートマ〔至高のアートマ〕とプラクリティ〔自然〕は、物体とその鏡像のようなものである。どこへ行こうとも、ラーダーとクリシュナという二相の組み合わせと交わりを、人々はこの世で目にすることになるだろう」

学生諸君、バーガヴァタのラーダーを平凡な女性と見なし、クリシュナを平凡な人間、一人の男性と見なし、彼らの間にある関係を、一般に人々が理解しているような単なる男女関係と見なすことは、大きな間違いです。それは、バーガヴァタという神聖な書物の著者が目的とするものとは、まったく相反しています。この関係は、神とその創造物の間に存在する、神聖な関係なのです。牛乳の白さを牛乳から切り離すことができないように、それを切り離すことはできません。牛乳の色は白です。牛乳から白い色を取り除くことはできません。牛乳をカード〔凝乳〕にしても、カードもまた、白い色をしています。カードを攪拌してバターミルクを得たとしても、バターミルクも白い色をしています。バターミルクからバターを分離しても、それもまた白い色です。ですから、あなたが何をしようとも、牛乳から牛乳の白い色を分離することは不可能なのです。白い色が牛乳にとって不可欠な部分であるのと同じように、ラーダーはクリシュナにとって不可欠な部分なのです。

ラーダーとクリシュナの間にある関係のような結びつきは、この世で無類のものであり、他に例がありません。今日、私たちがこのことを理解し、ラーダーとクリシュナの関係から引き出すことのできる教訓を、少なくともある程度、実践に移す

とき、初めて私たちは、神聖な姿におけるクリシュナの側面を世界中に広めることとなるでしょう。それとは反対に、ラーダーをただの個人と見なし、クリシュナを別の個人と見なして、彼らの間にある違いに基づいた考えを広めてはなりません。

ラーダーとクリシュナの一体性は、聖書の中で「神の国」として言及されています。このプラクリティとパラマートマの一体性の側面は、いくつかの宗教において、さまざまな言葉を用いて言及されてきました。一方、この国の太古の人々は、一般庶民にもラーダーの意味を理解できるようにするために、一つの姿と一つの名前〔ラーダー〕を創り出しました。けれども、絶え間なく常にクリシュナを思っている人は誰であれラーダーです。

ラーダーというのは、一つの相〔側面〕であって、名前ではありません。私たちは、このラーダーという清らかで神聖な相に、本来の意味を歪めた解釈をいくつか当てはめていました。ラーダーは、本体であるクリシュナを忠実に映し出す鏡像に他なりません。私たちは、自分をクリシュナへと導くような行為に着手しなければなりません。創造主はクリシュナです。創造物はプラクリティです。神聖な愛を培うことができるようになるには、行動が必要です。私たちは、クリシュナへの愛の結果として、クリシュナに到達できるようにならなければなりません。今日、私たちは、クリシュナに対するラーダーの愛の意味と意義を理解しました。私たちは今、ラーダーのすべての行為を、神聖な愛という背景のもとに解釈する準備を整えなければなりません。

サイババ述

Summer Showers in Brindavan 1978 Ch16